

茶の湯文化

中国から来たお茶は、鎌倉時代には薬として、その後は武家の社交の道具として茶の湯という文化と
なっていました。その過程で堺にゆかりの人々が重要な役割を果たしていきます。

奈良・平安時代(710年～)

平安時代、遣唐使として中国に渡った最澄や空海が茶を持ち帰り、比叡山に植えたのが始まりと伝わっています。

鎌倉時代(1185年～)

禅僧の栄西が茶をさらに広めて武家社会に浸透し、その後嗜好品として普及していきました。

室町時代(1336年～)

皮革商を営む豪商であった武野紹鷗(たけのじょうおう)が堺で茶の湯を広めました。堺
の佗茶(わびちゃ)の開祖ともいべき人物で、千利休などの門人を育てました。



武野紹鷗像
:写真提供 堺市博物館

大永2年(1522)、堺で倉庫業などを営む商家に、千利休が生まれました。武野紹鷗に
師事し、その後、織田信長、豊臣秀吉の茶頭として仕え、佗茶のスタイルを大成させまし
た。



千利休:写真提供 堺市博物館

弘治3年(1557)、南宋庵をもとにして南宗寺が創建。南宋庵・南宗寺には武野紹鷗や千利休が参禅し、禅の精
神を学んだと伝わっています。

安土桃山時代(1573年～)

天正19年(1591)、千利休、切腹(享年70)。豊臣秀吉に命じられたとされていますが、その理由については諸説あ
り、真相は謎に包まれています。

明治前期

明治維新で職を失った士族のため、駿府の地でお茶づくりが始まりました。その時にお茶栽培の指南役として、堺のお茶商人に白羽の矢が刺さったという説もあるほど、この時代の堺はお茶の集散地として栄えていました。



嘉永3年(1850)創業のつぼ市製茶本舗に代々伝わる碗(うす)。明暦元年(1655)の銘が刻まれています
:撮影協力/(株)つぼ市製茶本舗

明治中～後期

緑茶は輸出産業として隆盛し、堺の環濠(かんごう)内に200件もお茶を扱う店があったといえます。その後、静岡県清水港が明治32年(1899)に開港、海外への輸出の中心地が静岡へと移ってしまい、堺のお茶問屋は減少してしまいました。



明治16年出版(1883)の「住吉堺名所並ニ豪商家内記」に記された堺のお茶問屋の様子
:写真提供/国立国会図書館デジタルコレクション

現在

武野紹鷗や千利休が開花させた茶の湯文化と、南蛮貿易等により輸入された砂糖や香料などの原材料とが出会い、堺では古くから和菓子が作られてきました。現在でも、その系譜を伝える茶室や日本茶専門店などが点在しています。



南宗寺で行われる茶会の様子
:写真提供/(公社)堺観光コンベンション協会



嘉永3年(1850)創業のつぼ市製茶本舗が営む日本茶専門の茶室
:撮影協力/(株)つぼ市製茶本舗